

◆原則として送らないようにしたいもの（それらを必要としている場合を除く）

11. なまもの、賞味期限の短い食品
12. ガラス容器など割れやすい物
13. ガスボンベ※、使用法のない薬品類などの危険物
14. スキー板などの特殊なスポーツ、レジャー用品
15. 毛皮、指輪などの高級品
16. 取り扱いの難解な機器類や使用法のない物

※カセットボンベは含まれません。

人の善意って何なのか？ 残念ながらここにあげたものは、すべて事実として送られてきたもの。やっぱり大切なのは、送る側の勝手な解釈を慎むこと。被災者の気持ちを逆なでするような物は送らないようにしたいゾウ!!



#### ▶島原での経験

島原ボランティア協議会 事務局長 旭 芳郎

救援物資、もらってはじめて解る人の情けのありがたさ。とは言うものの、実際物資の仕分けをした人にしか解らない苦労もあります。一番困るのが賞味期限の短いもの。中でもオニギリはいけません。気持ちは解るが食べれない。食パンも短いので夏場は特に注意。スキー用品や戦時中の衣類、エロ雑誌、病院からもらって残った薬なども困りました。細かいことを書いたらキリがありませんが、中には大手化粧品メーカーで、倉庫を解体するのでデッドストックの商品をもらってくれ。但し運送代までは出せないのでは何とかならないか。とか、鮮魚とアイスクリームが大量に運び込まれて一気に配って廻るのに苦労したこともありました。

#### ▶食べ物の救援物資—こつのコツ

甲南女子大学 教授 奥田和子

阪神大震災の時にはたくさんの救援物資を送っていただきありがとうございました。しかし、中にはせっかく送っていただいたのに役立たなかったり、それを食べてお腹を痛めた人もいたことが調査でわかりました。残念なことですが現実には、賞味期間が切れたもの、輸送が長引いて腐った果実や野菜などが混じっていました。特にO-157事件でご存知のように、食べ物の大量供給には危険がつきもの。安易な気持ちの親切が、かえって大勢の人命を危険にさらすことにもなりかねません。「食べ物」はある意味で「細菌の汚染源＝毒物」であることを認識し、救援物資を送るときには次のような細心の注意が必要。『賞味期限が切れていないか確かめる、生もの・果実・野菜は避ける、食べて気持ちの和む食べ物、製造業者、製造年月日入りの食品』



◆古着で注意したいこと

## 18. 季節を考えましょう

今回はニーズが長く続いたので、夏物・冬物両方必要だった。でも震災当初は冬なのに、夏物が送られたりして、「どう考えても、いらぬものが送られた」と、ずいぶん被災者の気持ちを傷つけたんだゾウ!!



◆アンケートより

- 私自身、親類や知人から古い衣料品をもらうことが多いが、その中で役に立つのは1～2割くらいで、その相手が自分で処分するのが嫌で、いい物も悪い物もごちゃまぜで押しつけられたのではないかと思うことがある。そういうときは腹立たしい思いがする。  
(女、46才、主婦)

▶「とっておきの1着を神戸に下さい!」

ヌン・ソン・サン 浜松 青島孝宗

私たちは活動を通して“喜ばれることに喜びを感じて”ということを中心にやってきた。カンボジアに衣類を贈る運動では、国内で集められた衣料の中から夏物を年齢、性別に分類し、ボタン落ち等を直して贈った。選別梱包作業は大変ながらも、満足感溢れるものであった。この作業こそが贈る側の真心だと確信した。この経験から阪神・淡路大震災には、現地ボランティアの声に即応して、13台の原付バイク(中古)を1週間後には搬入した。歳末・冬物衣料募集時には「あなたのとっておきの1着を神戸にください」との呼び掛けに、必要かつ充分の善意が寄せられた。今、私たちはこう言える。物資を送るということは“まごころ”を贈ることなのだ。

### 一口メモ

▶アメリカ連邦緊急事態管理庁(FEMA)の体験から

曹洞宗国際ボランティア会(SVA) 市川 斉

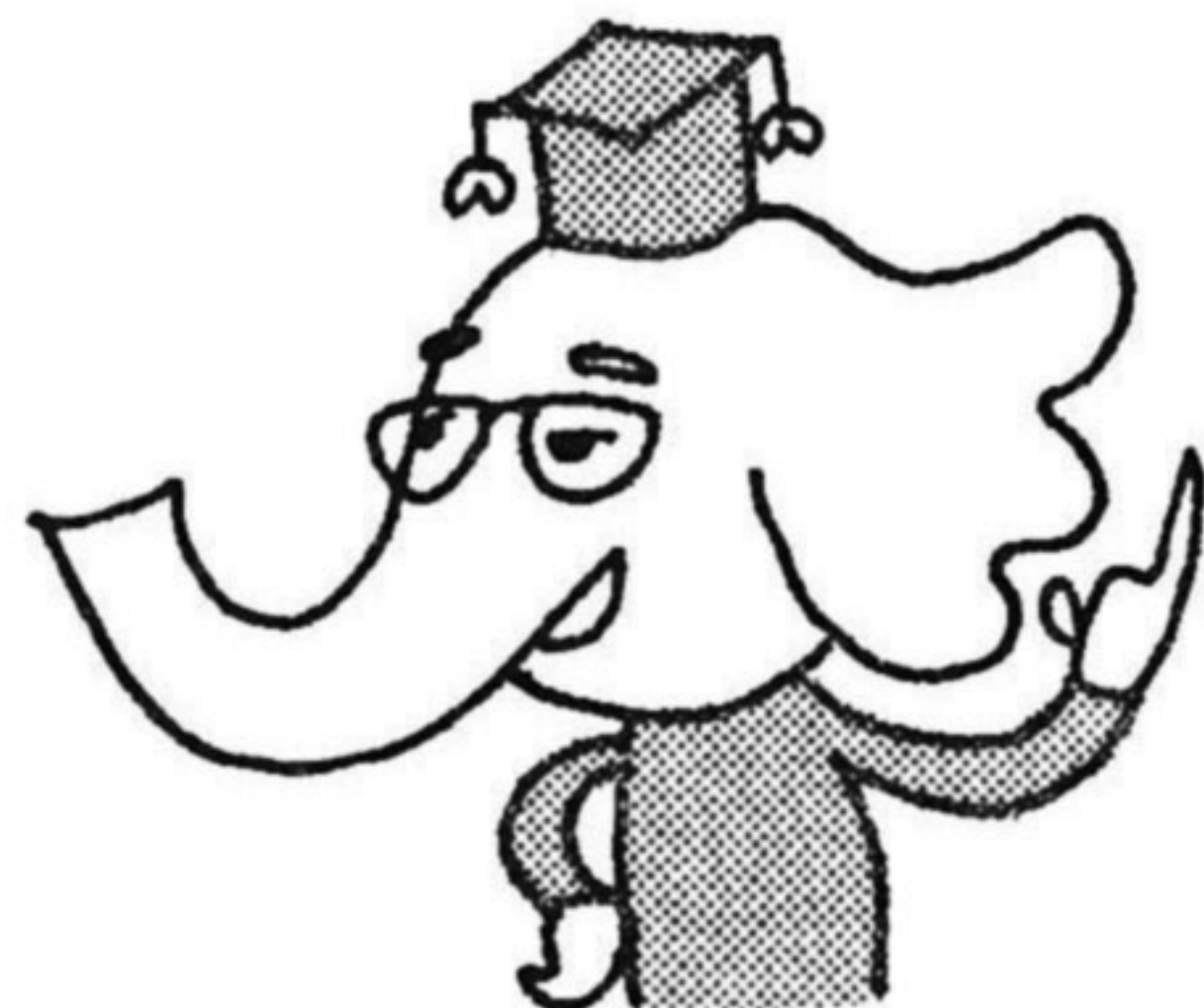
アメリカであった話。フロリダで災害があったとき、全国から“善意”の衣類が送られてきた。しかしうまく被災者に提供できず、高さ17フィート(約5.2m)、3～4エーカー(約12,000～16,000㎡)の洋服の山ができてしまったという。またある時は、救援物資を満載したトラックが次々に到着し、その対応に追われた消防署職員は本来の業務ができなかった。善意の物資はありがたいが、時には交通渋滞を招き、現場の救援活動を行っているスタッフの労力を引き裂き、最後にゴミの山になってしまう。アメリカではあらゆる災害に対応するFEMAが、物資受付のシステムを確立しているというが、日本でも本腰を入れて検討する必要があるのではないのだろうか。



◆古着で注意したいこと

19. 性別・サイズ・年齢・品目を箱に明記しましょう

物資を仕分けする中で、特にやっかいなのが衣類。一見しただけでは、性別やサイズがわからないものがほとんどだゾウ!! 送るならそれぞれに分ける。そして箱に明記する。できないなら送らない!!



◆朝鮮民主主義人民共和国への救援実例より

震災から学ぶボランティアネットの会

以下の種類に分けた上、箱に明記しました。(725箱分)

- ・長袖綿シャツ (男、女、子供)
- ・ジャージ上下セット(大人、子供)
- ・マタニティー
- ・半袖綿シャツ (男、女、子供)
- ・ジャージズボン(大人、子供)
- ・ママコート
- ・長袖Tシャツ (男、女、子供)
- ・ジャージ半ズボン (子供)
- ・長袖ベビー服
- ・半袖Tシャツ (男、女、子供)
- ・ブルマ(子供)
- ・半袖ベビー服
- ・トレーナー (男、女、子供)
- ・ジャージ長袖(大人、子供)
- ・おむつ・おむつカバー
- ・セーター (男、女、子供)
- ・ジャージ半袖(大人、子供)
- ・パジャマ
- ・ジャケット (男、女)
- ・長ズボン(男、女、子供)
- ・子供用ツーピース
- ・春コート (男、女)
- ・半ズボン(男、女、子供)
- ・肌着(男、女、子供)
- ・冬コート (男、女)
- ・春スカート
- ・靴下(大人、子供)
- ・スーツセット (男、女)
- ・冬スカート
- ・小物類(マフラー、帽子など)
- ・ベスト (男、女、子供)
- ・半袖ワンピース
- ・かばん
- ・防寒具 (男、女、子供)
- ・長袖ワンピース
- ・毛布、シーツ、タオルケット
- ・ジャンパー (男、女、子供)
- ・キュロット
- ・タオル、バスタオル

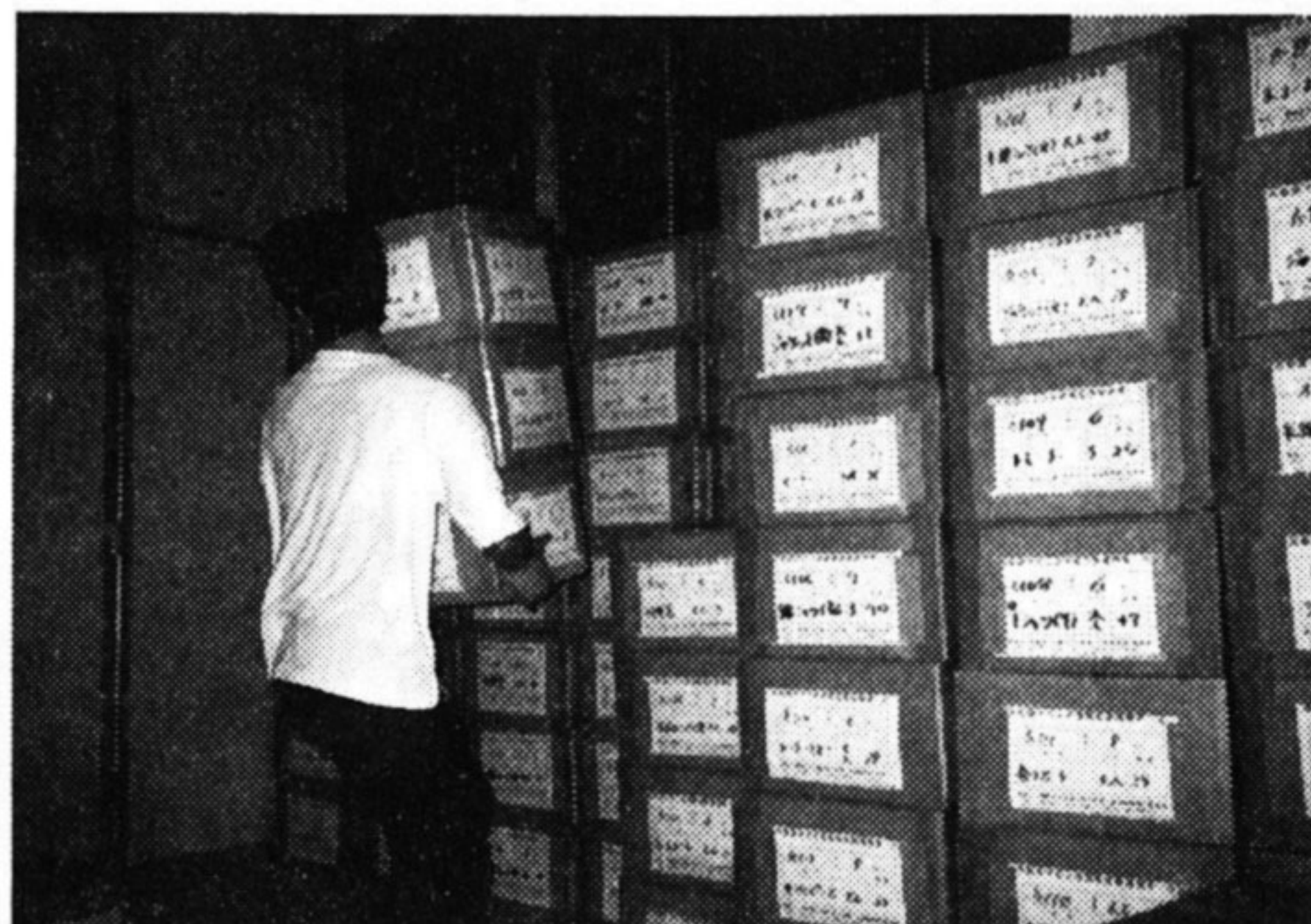
段ボールに貼付した「ラベル」

完成品を積み上げるボランティア / 97年6月

共和国子ども支援緊急救援物資

No.	品名	重量	サイズ	Kg	数量

発送人) 朝鮮民主主義人民共和国・緊急救援実行委員会  
 阪神・淡路大震災「仮設」支援NGO連絡会、神戸華僑総会  
 神戸YMCA、コープこうべ、阪神大震災地元NGO救援連絡会議





# 善意の古着——「弱った」!!

阪神大震災の発生以来、全国から善意の品が神戸市などに届いているが、その中に大量に含まれる古着をどう活用するか、救援物資の担当者が苦慮している。仕分けに手間取るうえ、被災者に配ろうとしても残ってしまい、たまる一方。関係者からは「店も開き始め、古い衣類は敬遠される。そんな事情を考えてほしいのだが」との声も出る。

## 仕分け手間取り あふれる一方…

### 神戸の救援物資倉庫

全体の八割が古着で、しかも大人用と子供用が交ざって詰めてあるのがほとんど。食料、おもちゃなどを一緒に入れた箱も多い。灘、東灘区の救援物資を担当する摩耶埠頭のコンテナ・ステーションには、毎日約四十トンの物資が入る。すぐに送り出される水や食料に比べ、古着は次々に山積みされるのが現状。あるボランティア(三巴)は「自分なら着たくないと思う服も多い」と話す。

一方、郵便小包で神戸市に寄せられた救援物資は段ボール箱で約六十万個。うち半分は配布を終え、約十



さまざまな種類の衣類が詰まった箱を開け、仕分けするボランティア神戸市内

万個は西区の神戸市外語大など三カ所で保管する。また大阪の郵便局留めが約二十万個のほか東海、関東地区の郵便局で留められている分もあるという。郵便物資は市社会福祉協議会が担当、一日平均千数百人のボランティアが約二万個ずつ仕分けする。ここでも問題は古着。量が多い割に需要は少なく、倉庫からあふれた分は屋外に積み上げている。同協議会の内藤弘士事務局長は「捨てるわけにもいかないが、放っておくとたまる一方で、作業にも支障をきたす」と頭を痛める。

大きな自然災害を受けた長崎県島原市や北海道・奥尻島にも古着が大量に送られ、「カビが生えた服もあった」「焼却処分にも多額のお金がかかった」などの話がある。神戸市では「気持ちには分かるが、問い合わせがあった場合、古着はお断りしている。送ってもらえぬなら、同種類をひとまとめにするなど工夫を」と呼び掛けている。



## 21. 被災地外へ必要としている物と数量を明確に伝えましょう

97年1月の日本海重油流出事故の折は見事だったね。必要な物はゴム手袋、ヒシヤクなど、広く、正確に伝わってきた。まさしく『震災から学ぶ』だ。こうして物が特定されると送る側の勝手な解釈はなくなり、混乱も少なくなるはずだゾウ!!



※P41 一口メモを参照して下さい

### ◆アンケートより

- 物によっては送る側で小分けにしてもらうとか、セット（多品目、医療品、文具など）にして送ってもらいたい物などはっきり伝える。使いやすい状態にして送ってもらうようにする。  
(女、25才、学生)
- 混乱の中で、必要とされている物と数量が、現地から遠く離れている所には伝わってこない。(流していないのか、流し方が少ないのか)  
(男、46才、公務員)
- 個人、非常時は本当に難しい。救援グループが直接現場に行き情報を調査、入手すること。  
(男、46才、その他)
- 救援物資は時間の流れで必要な物が変わる。現場から必要な物を適時伝える。  
(男、46才、その他)



災害後の混乱期は難しいと思います。  
(女、37才、会社員)



災害直後はちょっと無理です。  
(女、32才、会社員)



初期には困難ではないですか？  
(男、27才、会社員)

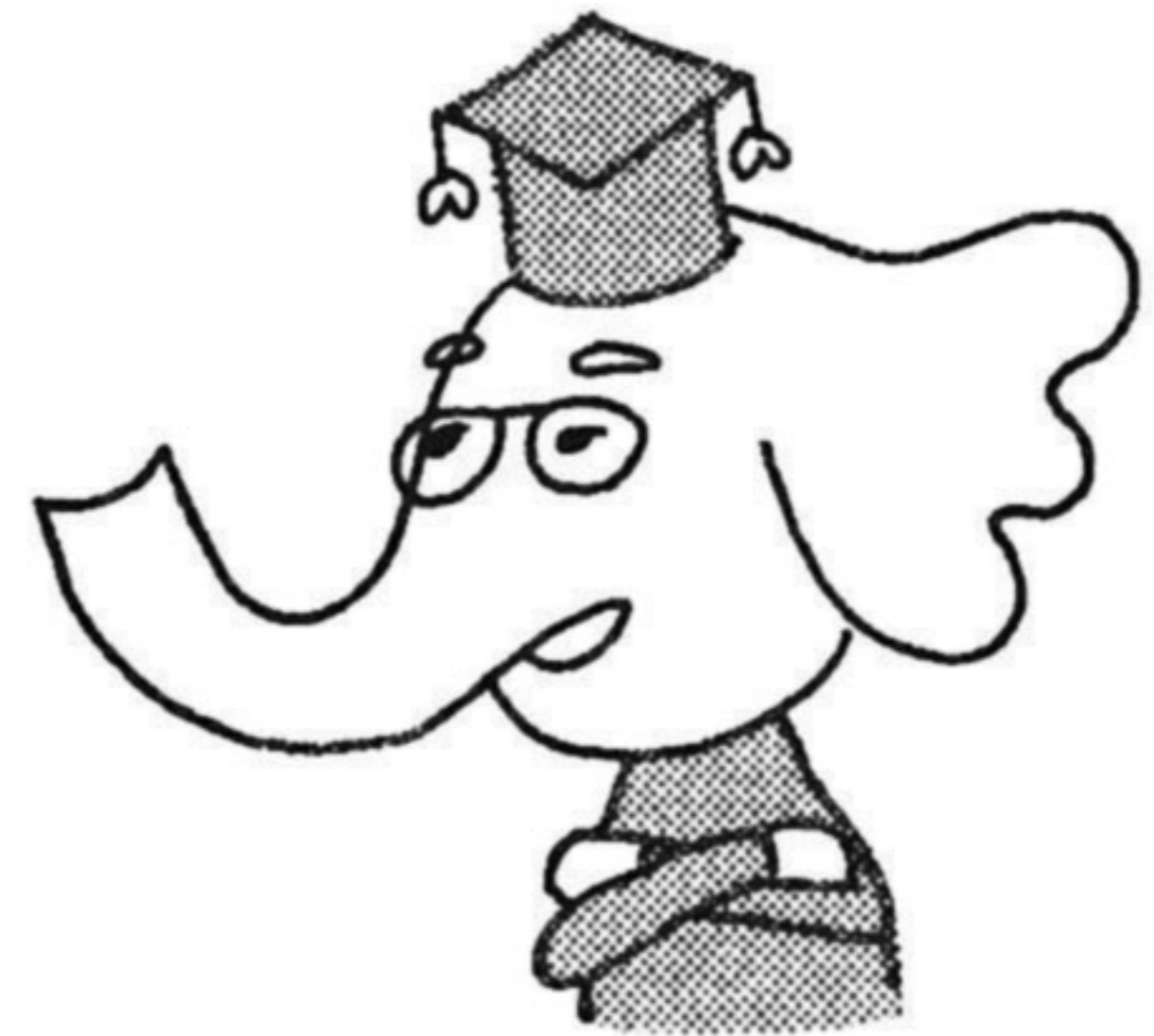
阪神・淡路大震災級の災害なら、最初の72時間必要な物を発信する事は本当に難しいよね。でも努力はしようよ。もちろんボランティア、行政、報道みんな力を合わせてね!





## 22. 救援物資をどこに送ればよいのか明確に伝えましょう

困っている人は沢山いるという漠然とした情報が多かったので、実際にはどこへ送れば良いのかがつかみにくかった。「〇〇で△△を受け付けている」という場所と内容をセットで発信することが必要なのだゾウ!!



### ◆アンケートより

- マスコミの使い方が、一つのポイントだろう。 (男、49才、会社員)
- 正規の避難所ではない小さな避難所では、受入れの窓口もなく、被災者の希望は考慮されませんでした。 (男、72才、無職)

▶ **毎日更新された!** とちぎボランティア情報ネットワーク 事務局長 矢野正広  
阪神・淡路大震災や日本海重油流出事故の後方支援として物資を集めた経験から、「モノは難しい」という思いに至った。例えば重油回収の時、マスコミで「物資を!」と呼びかけても、集まってくるのは早くて1週間後で、それを取りまとめ現地に送り出すのに数日から1週間……なんていう具合だ。1ヵ月後、バケツ、ヒシャクが要らなくなってから届けられたものもあった。収集停止のタイミングを見計らうのも大切だが、この時は現地団体のインターネット情報がとても良かった。届け場所(住所・電話・担当者)、数量など詳細が毎日更新されるのだ。もちろん送る前には電話で再確認が鉄則だけど。

### 一口メモ

#### ▶ 想像力とバランス感覚

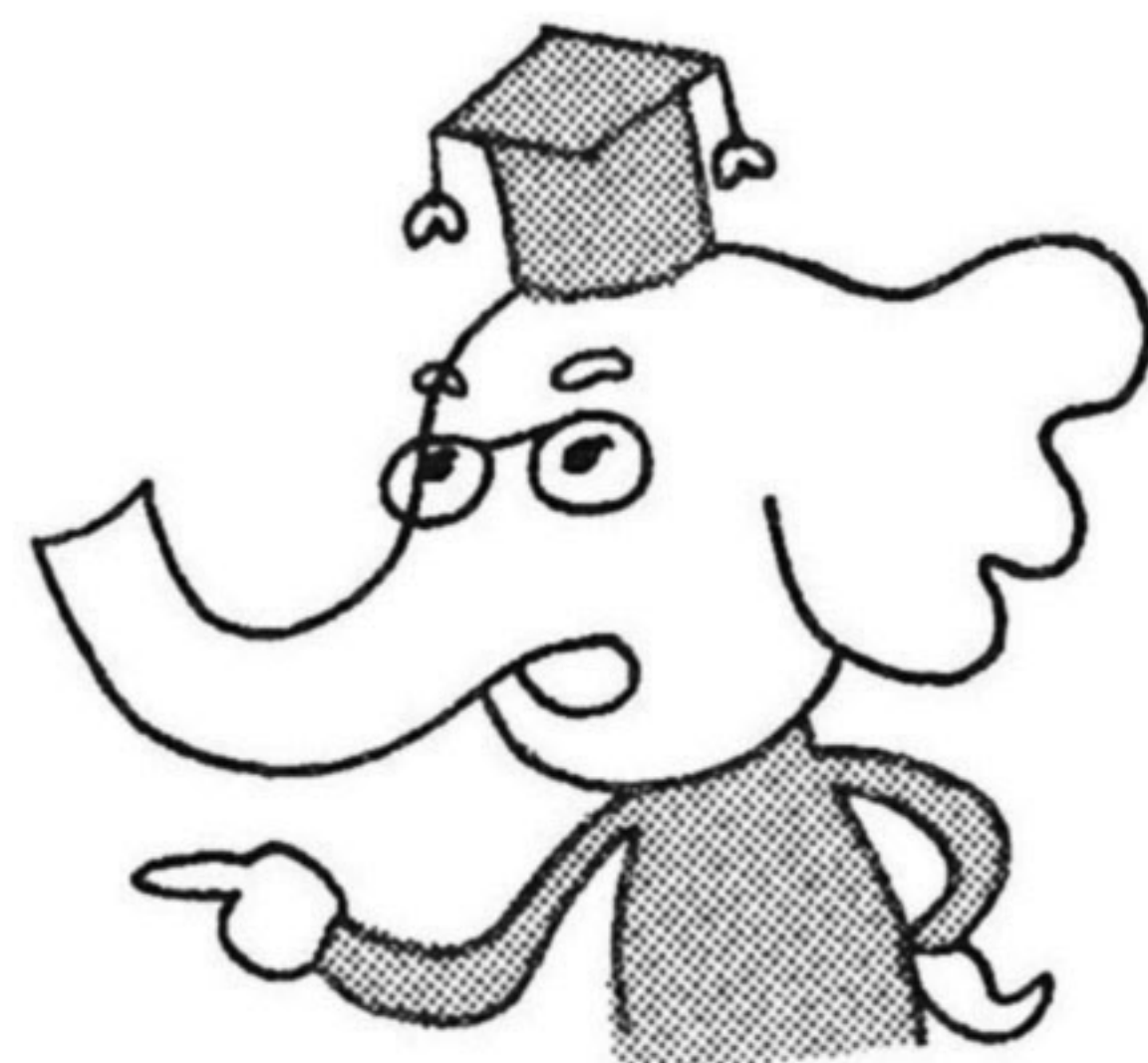
大阪ボランティア協会 永井美佳

「救援物資は被災地を襲う第2の災害である」というアメリカの言葉がある。一部マスコミの「〇〇がない」というヒステリックな報道に応えた市民の“善意”は“仕分けされていない物資”の山となり、その整理に膨大な人手を要して救援活動の負担となった。復興が進み営業を再開する店舗が出てくると、今度は無料で配られる大量の物資が、復興に努力する店舗の営業を妨害することになった。ボランティア活動は“絶対の善”ではない。活動のすべてが自動的に「善行」となる保障はないのだ。ボランティアの自由な活動が一定の有効性を持つためには、一定の資質が求められる。それは活動の結果を見通す「想像力」と、まわりの状況や関係性の中で行動を定める「バランス感覚」だ。自らの行為の“純粹さ”に酔いしれず、独自の意味と限界を理解しながら活動の方向性を定めることが、大災害という非常時には特に重要だと言える。



## 23. いつまで必要なのかを明確にしましょう

1日も早い復旧と復興はみんなの願い。とはいえ、人々の生活の自立を防げる過度の援助はマイナス効果となる。受け取る側はいつまで必要なのかを発信すべきだゾウ!!



### ◆アンケートより

- 受け取る人が受け身ではなく、自ら積極的にメッセージを発することが送り手にとっても何が今必要なのかが分かり、行動しやすいのではないか。 (男、23才、学生)
- やはり使う側の要望が明確な方が、送る側、送られる側、使う側が効率的に行動できます。情報発信の的確さが、ポイントになる。 (男、22才、学生)
- 受け入れも必要最小限とし購入は地元の活性化のために他からの受け入れは期限を限定すべきだ。 (男、52才、その他)

### ▶物資はあとからあとからやってきた!

プロジェクト結ぶ 代表 石井布紀子

緊急救援の3ヶ月間は毎日大きなトラックで物資をご提供いただき、ありがたいながらも、とまどいの多い日々を送りました。残念ながら、汚れたままの下着や壊れたおもちゃなどを受け取り、必要以上に落ち込んでしまった思い出も数多くあります。大量のスキーウェアを春先にいただいた時も真っ青。「防寒着が欲しい」と発信したのは、確か一月の終わりだったはず。「そうか、締切りを設定しなかったせいだ」と気付いたときはすでに遅し!!でした。「いつごろまで受け付けるのかをいわなくっちゃ」がその時に得た教訓です。皆さんも気をつけて下さいね。

### 一口メモ

日々刻々と変わる状況の中から、必要な物資を正確に把握し、常に最新情報のみを流す必要があると思う。必要なものと同時に、すでにいらないものの情報も徹底できたらと思う。

(女、27才、会社員)



## 24. いらない時はいらないとはっきり伝えましょう

救援物資という名目で、どう考えても被災地を処分場と間違えている物が数多く見られた。「いりません」なんて冷たいように言いにくいですが、それを伝えないといつまでたっても迷惑な押しつけは止まらないゾウ!!



### ◆ アンケートより

- 不必要なら、余分に受け取ったりしないようにしたい。 (女、24才、アルバイト)
- いくら好意で持ってきて下さっても、人々に配りにくい物(古すぎる)は、はっきり断ることが必要。なかなかできないが。 (男、不明)
- 必要な物を必要な場所、末端へ早く送るシステムを作って下さい。何でも「ありがとう」ではなく、失礼な物が送られてきたときは、はっきりと怒って世間に訴えるべき。 (女、36才、他)

### ▶ 1万個のゴムボール

コープこうべ住吉ボランティアセンター 林 律子

震災直後、全国から送られてきた救援物資は、私たちの命をつないでくれました。避難所で配られた1個のおにぎりがどんなにうれしかったことでしょう。しかし、交通渋滞に巻き込まれて腐ってしまった何百もの弁当を前にして途方にくれている所へ、子供達に配ってと1万個のゴムボールが到着し、配布はもちろん保管場所にも困り果てたこともありました。この震災のような大パニックは初めてで、いらないものを(今は)いらないと伝える手段も判断する人もいない状態でした。が、これからの災害時には、必要な物を効率的に届けるためにも、輸送・保管・配布まで考えた援助物資の準備をしたいものです。



目の前に持ってきてもらってから果たして「いらない」と言えるだろうか。とても難しいと思う。送る側のマナーをしっかりとしないのではないのでしょうか？ (女、22才、会社員)



よかれと思って送る気持ちには偽りはないので、あまりはっきりと「いらない」と伝えるのはどうかと思います。 (女、37才、会社員)

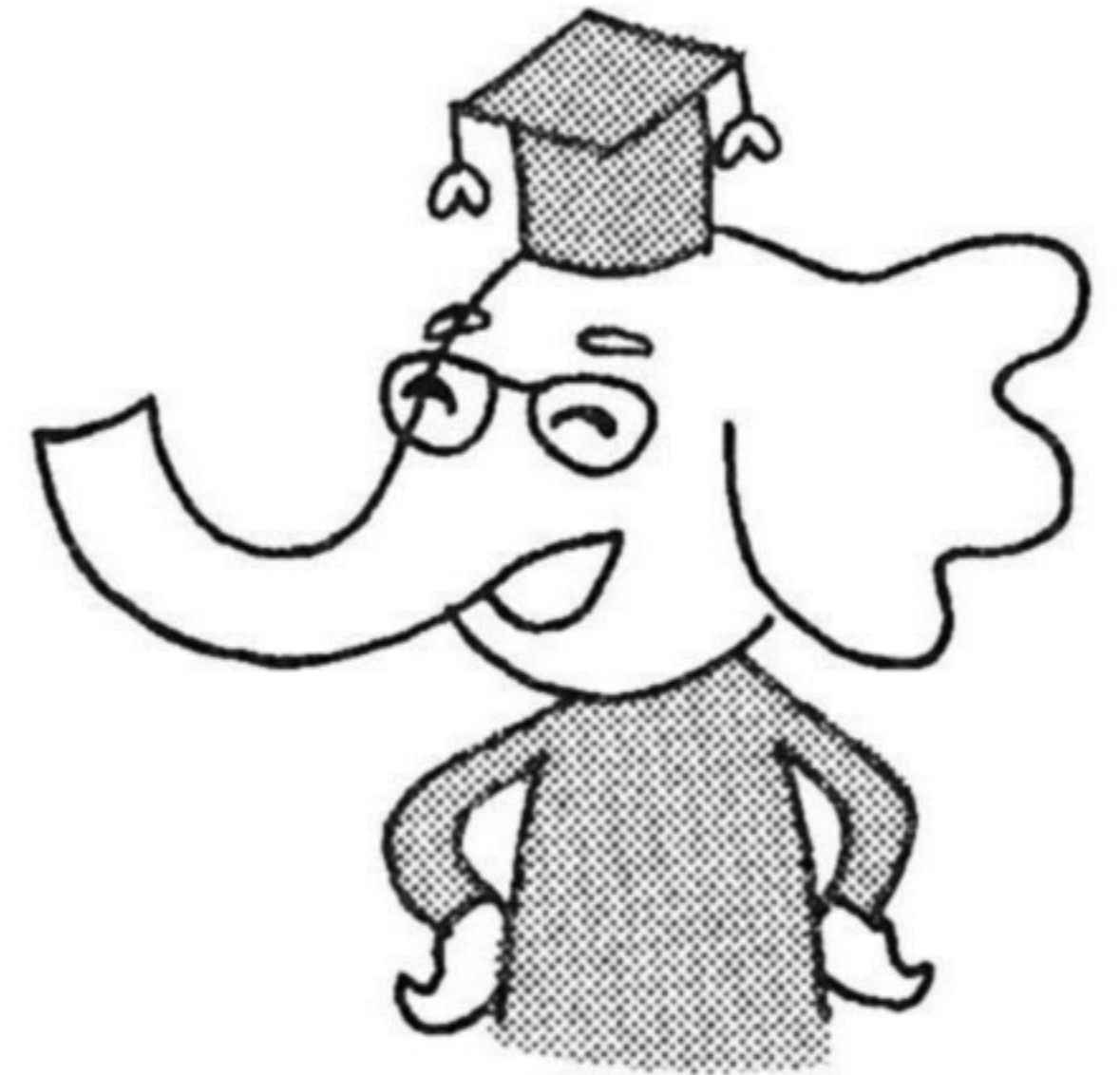
物資に気持ちがつまっていたのでつらかった。それは確かなこと。でも、いらないものを受けとり、結局捨ててしまった物も多かった。もったいないと思わないカイ？





## 25. 近隣の避難所などと連携し、過不足を補い合いましょう

ある避難所では大量に物資が届けられ、一方である避難所では必要な物資が常に不足し、ボランティアが駆けずりまわった例は少なくない。同じ被災地として分け合うことは当然だゾウ!!



### ◆アンケートより

- 要る物と要らない物を交換する。物々交換市が開設されるといいのではないのでしょうか。 (女、25才、学生)
- 避難所間での物資の融通とボランティア交流のためにネットワークが組まれた実例がある。物資は効率良く融通でき、他所の現状把握がある程度できたが、これを災害発生当初に立ち上げることは非常に困難なことだと思われる。やはり普段からマニュアルを作成しておいて、避難所になるところの責任者などが定期的集まって情報交換をしたり、地域の自治会なども巻き込んで考えていくべきであろう。これは地域住民の協力無しでは長続きしないシステムであると思う。 (男、21才、学生)

### ▶聴覚障害者支援の実践から 元同朋大学ボランティアネットワーク 平松恵美子

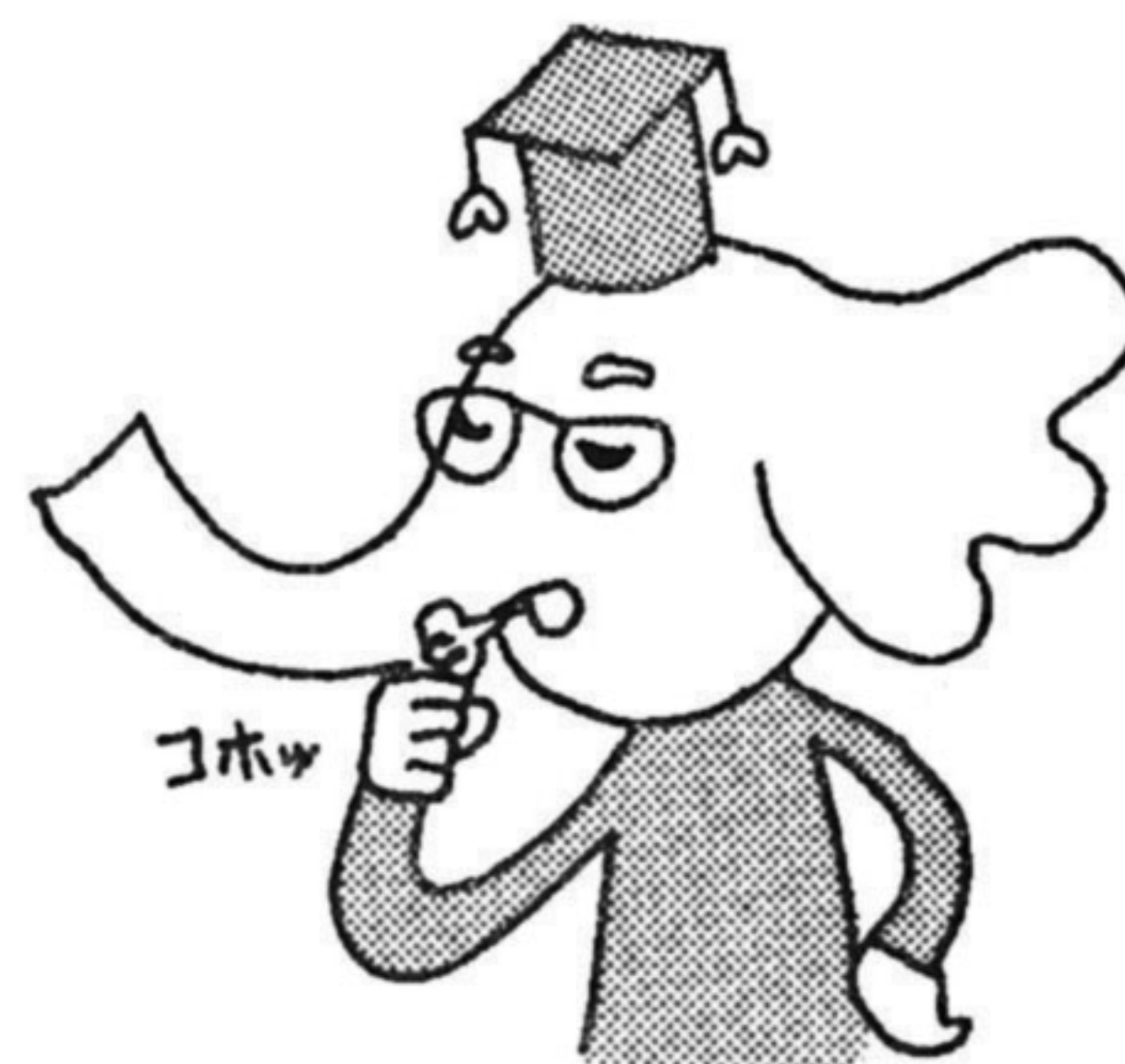
95年の2月より約1ヶ月、大阪ろうあ会館で活動している時から、情報の重要性を考えていました。ろうあ会館では、島原方式(P50参照)の簡単バージョンとも言うべき、物資を被災地外(大阪)で集め、ろうあハウス(神戸)からの「〇〇を下さい」という希望にそったものを運ぶというシステムでした。しかし、神戸ろうあハウスでは、必要とされていないカイロや衣類が山積みになっており、それらを見ながら、「他の避難所では、もしかしたら必要としているのかも知れないのに……」と、もどかしい思いでいっぱいでした。もし、他の避難所の情報がわかっていたら、過不足を補い合うことができたはずです。避難所間の連携、または各避難所の情報を全体的に把握する機関が必要だと思います。そして、正確な情報をすべての人が知ることのできるようにすることが大切だと思います。





## 26. 保管管理・流通は企業などプロの方法を参考にしましょう

日々それらを職業としている人々の方法は実に効率が良い。その方法を私たちボランティアも学び、あるいはその指導の下で活動ができれば、より早く、より正確に必要な人のもとへ届くはずだゾウ!!



### ◆アンケートより

- プロの人に、真っ先をお願いして、人と物とを動かしてもらうのがよいと思う。  
(男、49才、会社員)
- そのときにどうするかではなく、日常からすぐに参考に出来る形を作っておかなくては。  
(女、21才、学生)
- 保管管理、流通の知識のある企業、団体からアドバイスできる人が派遣できる体制ができたらいいと思う。  
(女、24才、会社員)

### ▶ コープこうべが果たした役割

コープこうべ住吉コープボランティアセンター係長 鳩岡圭二

95年1月17日、阪神・淡路大震災が発生。私たちコープこうべは阪神地区の中心部にあたる神戸市東灘区の本部ビルを失いました。交通が寸断され、ライフラインの復旧メドもたたない状況では、指示命令の出来る本部機能は本当に大切です。その時まず第一に私たちの行った行動は対策本部を設置して、店舗を早急にオープンさせることを指示しました。今回の震災で、便乗値上げや窃盗などのパニックが発生しなかった大きな要因は、この指示にあったと思います。それが出来たのは、物資の確保調達する機能を兵庫県三木市に、物流の窓口を西宮市鳴尾浜・北区とそれぞれ被害の少なかった場所に設置し、全国からの物資受入体制を作った結果だと思っています。

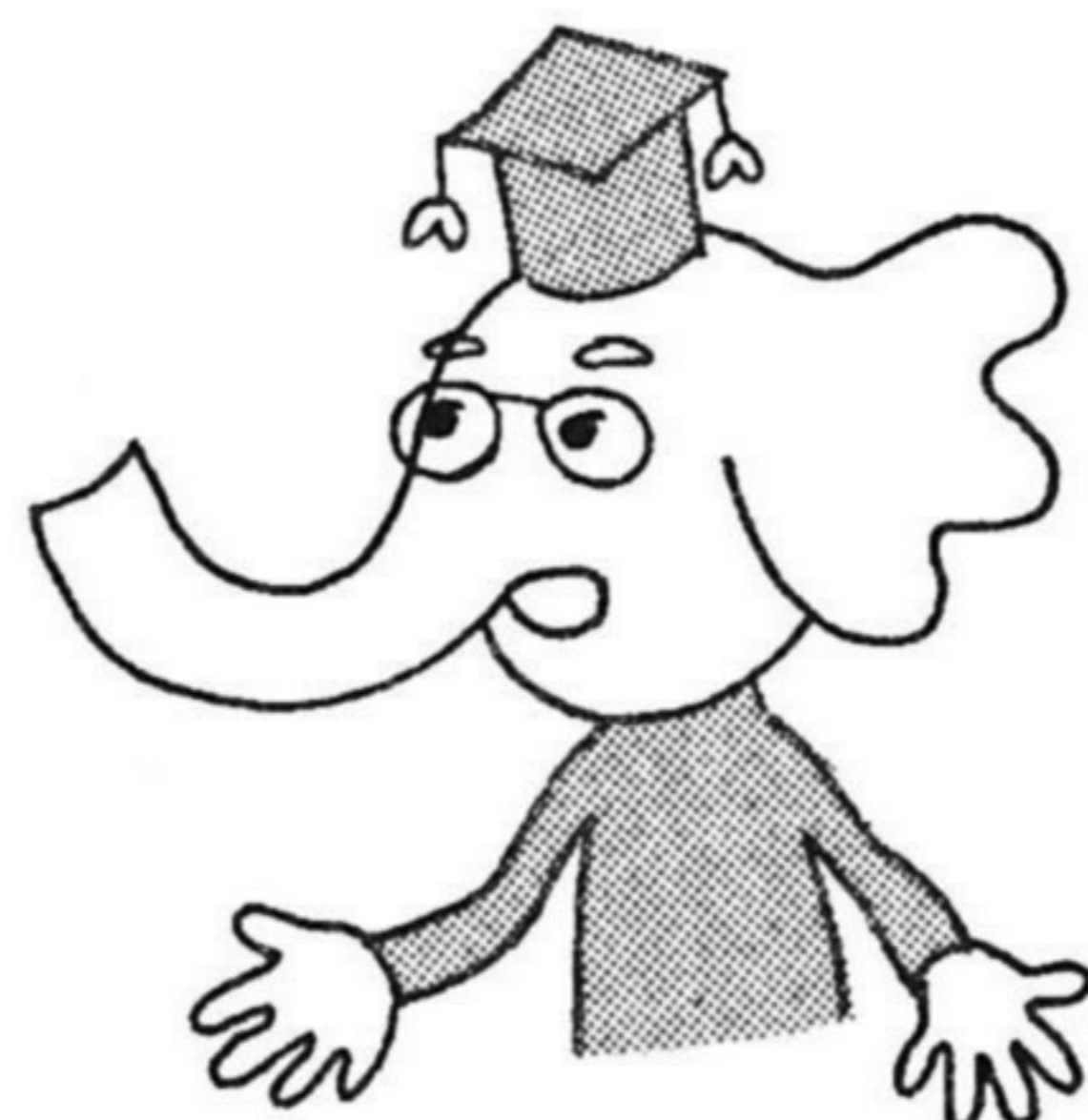
### 一 口 へ へ

私たちが物資を集めた時、スキー用品や古着が届きそれについて引き取りを求めたところ、大きなトラブルに発展した。受ける側が発信することは、わがままでないことの理解が必要と感じた。  
(女、57才、自営業)



## 27. 余った物はリサイクル店へ寄贈するなど有効に利用しましょう

「被災地のために」と送られたものは、基本的には被災地で生かされなければならない。この意味で特に被災地内のあるいは被災地を応援するリサイクル店への寄贈は有益だゾウ!!



### ◆ アンケートより

- 不必要な物資はリサイクル、フリーマーケットなどして現金化して現地に送ることを考えたい。 (女、48才、主婦)
- 他の所で必要とされる方にさしあげればよい。 (女、50才、主婦)
- 仕分け作業の経験上、余るものはリサイクルもできないようなものばかり。リサイクル店はできない。 (女、22才、その他)

### ▶ 「こんなにあったのか……」

プロジェクト1-2 代表 有光るみ

災害直後、自宅が全焼した友人にとりあえず必要な日用品をと思い必死で探していた時のことである。食器、石けん、タオルetc…、お中元やお歳暮、引出物等でもらったまま使っていない物がたくさん出てきた。友人は、それらをとても喜んで使ってくれたが、十分な物が揃っていたわけではなく、一つのお椀がお茶碗になったり時にコップになったりした。ある日突然、日常がうばわれ、手元には何一つないという状況の中「なあ、〇〇持ってへん?」「あるで、使いよ」という助け合いが生まれたのはごく自然の流れだった。

私達は経験から物を大切に使うこと、そして物を活用することを学んだ。自分にとっては使う予定のない物であってもそれを必要とする」人もいる。「本当にそれを必要とする人のもとへ」……この考えから私達は今、被災地で全国の皆さんの家庭に眠っている日用品を送っていただいて“リサイクルバザー”を開いている。あなたたちにとって使わない物でも、それを必要としている人は確実にいらっしゃるから……。





## ◆送り主へのお礼（礼状や電話など）は必要か？

### 《必要派》

- 知性と愛情で速やかに支援先へ礼状の発送をしたい。 (女、69才、その他)
- 送り手が分かっているときは、葉書一枚でもお礼状を出したい。 (男、43才、会社員)
- まず、物資が届いた旨の電話をするのは、受け取り側の義務ではないか？ (女、50才、無職)
- 物資をうけとった場合、状況が落ち着いたら、返礼の葉書をとどけること。人と人との関わりはマナーから。 (女、59才、その他)

### 《不要派》

- 「受け取り状や礼状はなし」を提言したいと思います。「その労力を現地へ」。ボランティア行為に対して、ボランティアの方たちが礼状書きに追われることのないように。「ボランティア行為に対する常識」となれば良いと思います。経費がかかる訳ですし、ささやかな支援がこのような事に使われるのかと、割り切れない心地のしたことがあります。 (女、45才、その他)
- 現地はお礼状を書いている余裕はありません。無償の善意を送ることでよしとしましょう。 (男、38才、自営業)
- 精神的な負担を考えて、反対なんです。 (男、41才、その他)

う～ん。必要か必要でないかは一概に決められなく、それぞれの判断だね。礼状を出したくても、毎日どんどん届けられる物資一つ一つに礼状を送るのは物理的に不可能かも。……でも「送るだけ」「受け取るだけ」の一方通行の関係より「使ってね」「ありがとう」の人の見える関係は何らかの形で作っていきたいね!!



▶ 被災者と支援者の媒体となった責任として 曹洞宗国際ボランティア会(SVA) 喜多村慎子  
SVAでは、海外を支援した場合でも、今回の阪神・淡路大震災においても支援をしていただいた方には、必ずお礼と、どの様に使わせて頂いたかを報告させて頂いています。これは、被災者と支援者の媒体となった者の責任だと感じています。しかし、被災者の方にお礼状を書いてもらうことや、媒体側でも緊急救援期に一人一人にお礼状や報告をおこなうのは、状況からいっても無理でした。けれども、媒体となった者が、その時の様子や使い道をできる範囲で、後からでも報告することは、大変重要なことだと考え実行しています。